

《博士論文要旨および審査報告》

下宮忠雄 ヨーロッパ諸語の類型論

——学位請求論文——

I 論文要旨

下宮忠雄

ヨーロッパ（人口7億，言語数60）は，その創造者であるギリシア・ラテンという二つの大きな文明語とキリスト教を土台にして，言語的および文化的な連合体（Sprach- und Kulturbund）を構成している。これら諸言語の2000年の歴史と，その統一性および多様性（unity and diversity）を追求するのが，本論文の目的である。

全体を6章に分けて，総論，語彙の問題，文法，周辺領域（バスク語，ゲルジア語，コーカサス諸語），言語学の副産物，主要ヨーロッパ10言語（英語を除く）の概説とした。

第1章（総論）ではヨーロッパのマクロ方言学の具体例が提示される。冠詞の発達している言語域（ゲルマン諸語，ロマンス諸語），発達していない言語域（スラヴ諸語，バルト諸語）がある。月曜日を「月の日」というエ Monday，ド Montag，フ lundi に対し，ギリシア語 deutéra（ゼフテラ），ポルトガル語 segunda-feira は「第2日」（日曜日起算）となる。

第2章（語彙の問題）では等語（isogloss）と異語（heterogloss）などが論じられる。be（am, are, is, was, been）はすべての印欧語に共通であるが，have は言語により異なる。

第3章（文法）では文法範疇の貧弱化と豊富化が論じられる。英語における grammatical gender の消失，格変化，人称変化は貧弱化であり，ゲルマン語・スラヴ語の三性の保持，英語における進行形などのテンスの豊富化，格変化を補う前置詞の発達などが扱われる。

第4章(周辺地域):バスク語とコーカサス諸語は系統は異なるが, 能格 (ergative case), 二十進法 (vigesimal system), 動詞の多人称性 (polypersonalism) が共通している。

第5章(言語学の副産物):「星の王子さま」と言語学, ことわざの言語学を論じる。

第6章(主要ヨーロッパ諸語概説):ドイツ語, フランス語, スペイン語, イタリア語, ラテン語, ギリシア語, ロシア語, デンマーク語, ウェールズ語, バスク語の10言語について, 音韻・文法・語彙の特徴を述べる。

ヨーロッパを東西に分けると, 西側の言語(ヨーロッパの表庭 Vorhof, インディアナ大学の Gyula Décsy ジュラ・デーチの用語)は言語的改新 (innovation) に積極的, 東側の言語(ヨーロッパの裏庭 Hinterhof)は言語的改新に消極的である。冠詞や完了時制は西側の言語には発達しているが, 東側の言語(スラヴ諸語)には発達していない。

ヨーロッパ諸語の文法特徴を declension (曲用, 名詞類の変化) と conjugation (活用, 動詞の変化) について見ると, 概略, 次のようになる。

南ヨーロッパ: less declension (曲用単純化), rich conjugation (活用豊富)

北・西ヨーロッパ: poor declension (曲用単純), poor conjugation (活用単純)

中部ヨーロッパ: fair declension (曲用中程度), fair conjugation (活用中程度)

東ヨーロッパ: rich declension (曲用豊富), rich conjugation (活用豊富)

Ⅱ 審査報告

主論文 『ヨーロッパ諸語の類型論』 学習院大学 2001年

副論文 *Alliteration in the Poetic Edda* 未刊行論文 2009年

(主査) 専修大学文学部教授 松下 知紀

(副査) 専修大学文学部教授 三浦 弘

(副査) 学習院大学文学部教授 高田 博行

審査委員会は、提出された主論文と副論文を（１）問題関心と研究の先進性、（２）論文構成の説得性と研究の到達点、（３）文献収集の広範さと実証性、（４）将来展望の観点から審査した。また、口述試験において、直接、申請者本人より上述の審査点について判断材料を得た。

1. 問題関心と研究の先進性

ヨーロッパ地域における諸言語は、ゲルマン諸語（英語、ドイツ語、ノルウェー語、アイスランド語等）とロマンス諸語（フランス語、イタリア語、スペイン語等）を中心に、ハンガリー語、バスク語、フィンランド語などを指すが、言語間で様々な類似性と異質性を持っている。下宮氏はヨーロッパ諸語の重層性に着目して、これらの「類型論」を提示している。このようにヨーロッパ全域に及ぶ複雑な言語の諸相を冷静に、客観的に捉えようとするのが、本書の意図である。

ヨーロッパの諸言語をこれほど大規模に扱う力量とバスク語やグルジア語のような、一般に系統性や類型論の議論に含まれにくい言語をも含めて、記述を行い、従来日本ではほとんど知られていない、様々な言語事実と関連を示している点が極めて評価できる。

2. 論文構成の説得性と研究の到達点

主論文『ヨーロッパ諸語の類型論』は第1章から第6章までにより構成されている。

第1章：総論

1) ヨーロッパのマクロ方言学

ジュラ・デーチ (Gyula Décsy) の分析に基づいて、ゲルマン語派の方言学とロマンス語派の方言学の立場から、屈折の多少、文法的性の数、述語的形容詞の性・数変化の有無などについて検討する。さらに、各言語の文字数の多少、冠詞の発達・未発達、定冠詞の後置・前置、人称語尾の多少、アスペクト・テンスの役割、曜日名の起源などを基準として分類を行う。

コセリウ (Coseiru) の立場から印欧方言学については *Europaeisch* と *Indoperisch* に大別した後、地域方言・社会方言・文体の3種の相違をもつ立方体系として個別言語を記述した後、ヨーロッパの3大言語群をゲルマン諸語 (5億) とロマンス諸語 (4億) を表庭 (Vorhof) であり言語的革新に積極的であるのに対して、スラヴ諸語 (3億) を裏庭 (Hinterhof) であり保守的である、と指摘する。これらの3大言語群の相互関係を適切に指摘した後、スイスの4公用語の地域を人口比を具体的に示して、スイス・ドイツ語の成立についてヨーロッパ言語地理学を援用して下宮氏は概説している。

2) ヨーロッパの言語変化の傾向

ヨーロッパ諸語を2000年間の歴史から考察すると、冠詞の発達、複合時制の発達、be, have 動詞の文法化、形態論の簡易化などを E. Sapir にならって drift (潮流) として捉える。西欧が言語的革新に積極的であるのに対して、東欧は保守的であると述べ、H. Wagner (1959, 24) の 'Jede Sprache ist mit ihrer Nachbarsprache typologisch verwandt (すべての言語は隣接する言語と類型論的に類似している) を支持する。さらに、下宮氏は、Drift として次の7つを取り上げている。Drift 1: 「冠詞の発達」は古典ギリシャ語において発達した定冠詞が俗ラテン語に伝わり、ロマンス諸語に伝播したこと、ゲルマン諸語においてゴート語、古代ノルド語には冠詞がなかったこと、さらに、ハンガリー語では1350—1420年ごろ定冠詞が発達したが、「ハンガリー語の印欧語化」(Lewy) の研究にも言及する。Drift 2: 「複合時制」の発達について、俗ラテン語からゲルマン諸語に広まり、さらに、フィンランド語にも伝えられたことを指摘する。Drift 3: 「be, have の文法化」は "be", "have" が受動態、進行形、複合時制に生じた過程を論じている。Drift 4: 「形態論の単純化」についてヨーロッパ諸語の中で英語とデンマーク語において

総合形 (synthetic form) から分析形 (analytic form) への変化が最も進んでいる、と指摘する。Drift 5:「音韻発達」は二重母音化, 口蓋化のような, 様々な変化を示すが, ヨーロッパ諸語は25—40個の音素を持ち, 理想的な状態である, と述べる。Drift 6:「文化的語彙, 学術用語」の伝播はギリシャ語, ラテン語が中心になって行われたと指摘し, 具体例を示している。Drift 7:「西ヨーロッパ諸語における機能動詞の発達」について, ラテン語の *iter facio* (旅行する) からフランス語の *faire l'achat* (*acheter* (買う)), イタリア語の *fare la strada* (*viaggiare, camminare* (旅行する, 歩く)), ドイツ語の *den Einfluss ueben* (影響を与える) などが現れた, とする。

先行研究について把握したうえで, ゲルマン諸語とロマンス諸語を論じながら, 同時に, ハンガリー語やフィンランド語にも言及する下宮氏の幅広い学識が窺える。

3) ゲルマン諸語の統一性と多様性

「ゲルマン語の最重要の特徴」を H. Krahe (1969) の11項目に基づいて検討する。(1:語アクセントの第1音節へ固定化, 2:子音推移, 3:鳴音的流音・鼻音が *ur, ul, um, un* に変化, 4: *a, o > a, ā, ō > ō*, 5:語末音法則 (ゲルマン祖語 **dagaz > Goth dags, ON dagr*), 6:アプラウト現象, 7:格の融合 (西ゲルマン語の5格が4, 3, 2, ゼロに縮小), 8:名詞の *n*-曲用 (*oxen*), 9:形容詞の強変化と弱変化, 10:時制と法の形態論の弱化, 11:弱変化動詞の過去形へ一般化)。下宮氏はこれらに独自の特徴を追加して, ゲルマン諸語が言語的革新に積極的であると述べる。また, ゲルマン諸語内部の語彙の相違を具体的に検討している。

4) ゲルマン語はどのくらい印欧語的か

Swadesh (1952) の200語の基礎語彙に基づいて印欧語の純度 (Indo-European purity) に従って3項目に分類すると, ゲルマン語は, 先史時代に基層言語 (substratum) からの残存物があるので歴史時代における多くの改新 (innovation) にもかかわらず, ラテン語やギリシャ語と同じくらい高度に印欧語的である, と指摘する。大局的な観察が示された興味深い分析である。

5) ロマンズ語の類型論

ロマンス語の特徴を通時的側面と共時的側面から考察して、通時的に見て、1：言語の3つの層（基層，上層，側層）が存在し，2：俗ラテン語から個別ロマンス語へと分岐的発達を遂げた，3：古典ラテン語には見られなかった，冠詞の発達，完了時制の発達，所有表現が俗ラテン語から個別ロマンス語への発達過程で生じた，と指摘する。

また，共時的考察として，1：ロマンス諸語における音韻体系を比較し，2：形態統辞(morphosyntaxe)の比較考察を行い，3：数詞16の表示法を比較し，4：屈折孤立化を E. Lewy (1964) に従い屈折単純化と捉える。5：代名詞の振舞いについて述べ，再帰代名詞がかなり発達していることと，関係代名詞の起源について言及する。

6) スペイン語と他のロマンス語

スペイン語は，1：ケルト語，イベリア語が基層言語であり，2：ラテン語が主要層となり，3：ゴート語が上層言語，4：アラビア語も上層語などとして構成された，と指摘する。

また，その他のロマンス語と比較して，1：スペイン語にはラテン語の古い層がある，2：形態法には膠着(こうちゃく)的性格がある，3：——略——，4：規則外となるアクセントを正書法で表示する，5：音韻について，二重母音が多く，硬口蓋音 [ɲ] が多い，6：形態統辞として目的格代名詞の位置，動詞の人称変化，未来形などを取り上げ，7：語形成，8：語法，9：語彙について論じている。

類似性が大きいロマンス諸語のなかでスペイン語の独自性を示す論考となっている。

第2章：語彙の問題

7) 語彙の問題，等語と異語

語彙は言語の中心を成す原料であり，在来語，外来語と借用語がある。語の対義性 (antonymy) が The sun rises vs The sun sets には認められるが，ドイツ語には Die Sonne geht auf vs Die Sonne geht unter があり共通部分を指摘できる，とする。また，整合性 (symmetry) について英語の deep vs shallow には対称性

が認められないが、フランス語の *profond* vs *peu profond* には認められる。

言語地理学の等語線 (isogloss) は「リンゴ」を示す *apple*-*Apfel*-*ubull* (Ir) などとは同じ起源の単語を使用するが、フランス語 *pomme*、スペイン語 *manzana*、イタリア語 *mela* は異なる語域を示すことに注目し、下宮氏は「異語 (heterogloss)」という概念を利用しゲルマン語、ロマンス語の基本語彙について検証する。

8) 俗ラテン語におけるゲルマン語からの借用語

俗ラテン語におけるゲルマン語からの借用語として、*burgus* (城)、*hosa* (ズボン)、*sapo* (石鹸)、*suppa* (スープ) などがあると指摘する。詳細な検証がされているすぐれた1章である。

9) 印欧語の擬音語

印欧祖語の擬音語 (オノマトペ) について Watkins (1985) と Pokorny (1959) を調査して、言語別に擬音語の多少・特徴を述べ、文学作品における特徴も言及している。

10) 印欧語の色彩名

印欧語の色彩語は *white*, *black*, *red*, *blue*, *green*, *yellow* であるが、印欧語の例を取り上げている。

第3章：文法

11) ヨーロッパ諸語の口蓋化

口蓋化 (後続の *i*, *j* により子音・母音が同化すること) は普遍的な現象でいつの時代のどの言語にも生起するが、印欧諸語の東方グループに最も早く生じた、と指摘する。古典ギリシャ語から現代ギリシャ語にかけて [i], [n] が生起し、ラテン語からアルバニア語に借用されるとき口蓋化が見られたり、中世ドイツ語から近代ドイツ語には [s] > [ʃ] が生じたことなどを詳細に下宮氏は述べている。スラヴ語、ロマンス語、ゲルマン語、アイルランド語などについて調査を行い、1：口蓋化は子音の長音点が前方に移動すること、2：口蓋化した子音は破擦音 ([tʃ], [dʃ]) を経て、歯擦音化 ([tʃ], [dʃ]) すること、3：変化表を統一

化する働きと歴史的条件に拘束されている場合があること、4：口蓋化には調音前方化 (i-Umlaut) のほかに調音後方化 (u-Umlaut: ON. tokom 'we take' (<*takom)), 5：ドイツ語では a, o, u が前方向に進むのに対して、ギリシャ語では ê, ei, oi, y が現代語では [i] になったこと、を要約している。

12) 名詞と性と数

「文法的性 (grammatical gender)」は印欧語族とセム語族に特有な文法範疇であるとして、ゲルマン語、ロマンス語などの言語を調査して、自然の性と文法的性の対応関係、修飾する形容詞と性の一致の問題についてフランス語、デンマーク語などの個別言語について記述する。さらに、スワヒリ語 (東アフリカ) やアワル語 (東コーカサス) の接辞の振舞いについても言及している。

また、古い印欧語には「双数 (dual)」が存在したことに触れ、ゴート語とロシア語に用例を求めている。

13) 代名詞

代名詞はどの言語でも基本的な言語財であり、印欧語代名詞の特徴は主格と斜格が異なる語根から派生している。印欧語の人称代名詞は1人称と2人称に性の区別を3人称のみが性の区別をもっていた、と指摘する。古代印欧語から近代印欧語への発達 は分岐的 と収束的 の二つの方向がある。

代名詞の発達の問題点を次のように整理して論じている。1：水平化が認められる、2：主語の義務的・任意的の対比、3：人称代名詞の1・2人称は男女性の区別がないが、付加語の機能により識別が可能、4：敬称2人称の発達、5：指示体系 (ラテン語では hic-iste-ille の3項体系、英語の this-that の2項体系) 6：所有代名詞と冠詞の共起 (イタリア語、ルーマニア語など)、7：二重の目的語表示 (アルバニア語、スペイン語など)、8：関係代名詞の起源 (指示代名詞、関係小詞、疑問詞)、9：冠詞の発達 (サンスクリット語やラテン語には冠詞がない)

14) 数の表現

十進法 (decimal system) が現代のヨーロッパ諸語も多くが十進法である。しかし、ケルト語、バスク語、コーカサス語は二十進法を用いている。数詞の問題

点を下宮氏は次のように列挙している。1：十進法（印欧諸語，セム語，チュルク諸語，フィン・ウゴル諸語，日本語など）と二十進法（バスク語，デンマーク語，コーカサス諸語）がある，2：「11」，「12」をゲルマン諸語では「1余り10」「2余り10」の表現を取る，3：ラテン語「18」「19」は「20マイナス2」「20マイナス1」の表現を取る，4：スラヴ諸語，ブルガリア・ルーマニア・アルバニア語において「11」から「19」を「1余り10」「9余り10」と表現する，5：ドイツ語，オランダ語，デンマーク語において「21」から「99」までを「1余り20」「2余り20」のように表現する，6：東スラヴ語では「40」を sorok で表す特別な語が存在する，7：ケルト諸語は二十進法が発達した，8：基数と序数との整合性について英語の one-two-three が first-second-third のように「第3の」以降は基数から派生する，9：ロシア語のように，数詞が名詞の単数または複数属格を要求する，10：名詞が単数か複数かによって動詞が数の一致をする言語が存在する，ことなどを多くの言語について詳細に記述している。

下宮氏がヨーロッパ諸語の「数の表現」について記述する態度は，ヨーロッパ流の言語学に耐え得る知識を身につけていることを窺わせるものである。

15) 未来の表現

古代印欧語において *-s* による未来形が支配していたが，サンスクリット語にも迂言形 (periphrasis) が見られたと指摘し，ヨーロッパ諸語の迂言表現のタイプを紹介する。また，ロマンス語の未来形式，バルカン地域の未来の表現形式，ゲルマン語の未来形式，スラヴ語の未来形式を詳しく論じた後，バスク語の未来形式についても言及する説得力のある論考となっている。

16) 再帰代名詞 *se* の消長

言語間の親族性を証明する証拠として印欧語の再帰代名詞 *se* を検討してヨーロッパ諸言語の関係を記述した手堅い論考である。1：*se* の語源と同族語彙，2：本来の再帰代名詞の様態，3：ラテン語の形式所相動詞 (deponentia; *L. nascor* 「生まれる」) はロマンス語において自動詞 (*It. nascere* 「生まれる」) などになる，4：中間受動態 (medio-passive: *Da. penge veksles* 「お金が両替される」) がノルド語とスラヴ語に共通，5：他動詞が再帰動詞として自動詞となる，6：多くのロマンス語は不定代名詞として再帰代名詞 *se* を用いる，7：

本来3人称に用いれる *se* が1人称・2人称へ拡張（バルト・スラヴ・ノルド語の *isogloss*），8：所有者の性別を英語では *his, her* で区別するがフランス語ではともに *son* を用いる。9：再帰代名詞の欠如が英語，ケルト語，ギリシャ語に見られるのに対して，ロマンス語，ゲルマン語，スラブ語では発達した。

17) 受動の表現形式

ヨーロッパ諸語において受動文の表現形式について下宮氏は考察し，次の8点にまとめている。1：ラテン語 (*laudor* 「私は褒められる」) から俗ラテン語の分析的表現 (*laudatus sum*) に発達した。2：「*be*+過去分詞」の受動文を回避するために再帰代名詞 *se* を用いるか，能動文を用いる，3：ゲルマン諸語のゴート語の場合 *bairada* '*er wird getragen* (*he was carried*)' のように助動詞を用いない（ギリシャ語と同じ），4：バルト諸語のリトワニア語では「*be*+過去分詞」で表現される，5：スラヴ語（ロシア語）は「*be*+過去分詞」で表現される，6：バルカン諸語（アルバニア語）では「*be*+過去分詞」で表現される，7：ケルト語（ブルトン語）はラテン語の *-r* 受動態を保持する，8：フィンランド語では受動態語尾 *-taan* などを持つことを指摘し，ゲルマン諸語を中心とするヨーロッパ諸語の受動表現を類型により分類している。

18) 接続法

接続法がサンスクリット，ギリシャ語，ラテン語の古典語で確立していたが，ロマンス語を除き，一般に弱化していった。古典ギリシャ語は接続法と希求法 (*optative*) と区別していたが，ラテン語では接続法のみとなり，ゴート語では形態論的に希求法のみになった。接続法を形態論的に保持しているのはロマンス諸語，ドイツ語，アイスランド語，リトアニア語であるのに対して，英語，オランダ語，デンマーク語，スウェーデン語，ノルウェー語，ロシア語は乏しい，と述べる。下宮氏の分析は多くの言語を対象に調査を行い，説得力のある結論を導き出している。

第4章：周辺地域

19) バスク語は *half-Romance* か

バスク語はロマンス語域の中で孤島をなしていて，語彙的には半分ロマンス語

と言えるが、文法構造はバスク語独自のものである。バスク語の基本語彙に占めるロマンス語起源の語彙は6.5%であると下宮氏は指摘し、具体例を示している。また、バスク語のロマンス語との関係を明確に図示している。

20) バスク語の音声特徴

バスク語は母音5つ (i, e, a, o, u) と二重母音5つ (ei, ai, oi, eu, au) を持つ。子音は p, t, k など20が存在する、と紹介する。さらに、特有の現象を記述し、語頭の p, t, k が有声化する傾向があり、母音間の d が方言により r になること、母音間の n は古い借用語において消失すること、側音 l は母音間で r になる。気音 [h] がフランス・バスク諸方言で存在するが、スペイン・バスク語では失われたことを具体的に示している。

バスク語にはアクセントがないこと、音声変化の特徴として語頭に r が現れず、その前に e が置かれ、r が重複すること、子音連続を好まず、母音挿入や子音脱落が生じることを下宮氏は指摘する。

21) スペインのバスク

バスク地方はフランス側の3州(10万人弱)とスペイン側の4州(50万人)の7州からなり、民族、言語、文化の統一性を持っている。また、バスク人の言語学者であるルイス・ミチュレナ(1915—87)が『バスク語歴史音韻論』(Fonética Histórica Vasca, 1961)を出版し、『バスク語語源辞典』を計画したことが紹介されている。

22) バスク語とコーカサス諸語の関係

バスク語とコーカサス諸語は印欧語族の周辺地域に存在している。両者の系統関係は不明だが、次のような典型的な特徴がある、1: 能格(ergative(自動詞の主語と他動詞の目的語が同じ格))、2: 20進法(vigesimal system)、3: 動詞における多人称性(polypersonalism)。下宮氏は、地中海の東方には黒海を囲むコーカサスが位置し、ピレネー山脈(バスク語地域)からヒマラヤに伸びる一連の褶曲山脈が形成する地帯は「ユーラシアのわだち」と呼ばれ、ユーラシアの言語連続体を形成していた、と紹介する。

23) ゲルジア語と言語類型論

ゲルジア語はゲルジア共和国（首都トビリシ）の公用語で350万人に用いられている。下宮氏はゲルジア語の音韻体系を紹介し、アクセントがバスク語のそれと類似していることを指摘する。また、ゲルジア語には印欧語のアブラウト（母音交替）の現象があり、形態音韻構造と従属文の発達から南コーカサス語と印欧語がユーラシア言語群で1つのグループを形成すると指摘している（Shimomiya, 1973）。

また、能格（ergative）はバスク語とコーカサス諸語に共通な格であること、バスク語・コーカサス諸語は20進法を持つことなどが紹介されている。

第5章：言語学の副産物

24) 『星の王子さま』と言語学

『星の王子さま』のフランス語版、ドイツ語版、英語版などを比較して、冠詞、音素、表現などを取り上げて、言語学と文学を結ぶのは文体論（stylistique）であるとする。

25) ことわざの言語学

ことわざについて、歴史、形式、名句などを取り上げ、ドイツ語、フランス語、英語について特徴を述べている。

第6章：主要ヨーロッパ諸語概説

ヨーロッパにおける主要な言語である、ドイツ語、フランス語、スペイン語、イタリア語、ラテン語、ギリシャ語、ロシア語、デンマーク語、ウエールズ語とバスク語を取り上げて、それぞれの言語の系統と言語人口、数詞・曜日名・固有名詞・あいさつ・名詞の文法的性・形容詞・動詞について簡潔にまとめている。

副論文：*Alliteration in the Poetic Edda*

「頭韻」は古英語と中英語の韻文に広く見られる文体であり、この現象をゲルマン諸語について観察するが長年望まれていたが、下宮氏は13世紀に古アイスランド語で書かれた *Edda* の「頭韻」について詳細に検討している。極めて貴重な論考である。

3. 文献収集の広範さと実証性

下宮氏は英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、イタリア語、ラテン語などで書かれた、約250の研究書と論文を調査して、巨視的な視点からヨーロッパの言語に関心を向け、独自の類型論を提案している。印欧語を含むヨーロッパ諸言語の基本的な研究書に目を通して、語彙と文法を中心に詳細に論じている。また、バスク語についてもヨーロッパの一言語としての特徴を捉えている。言語の類型論を規則的な部分だけでなく例外となる部分を含めて議論しており充実した論証が行われている。

4. 将来展望

下宮氏は、印欧語の語彙・形態論などを詳細に把握しており、ギリシャ語、ラテン語を初めヨーロッパのほとんどの言語について知識を有しており、今後とも大きな活躍が期待できる。また、「頭韻」はゲルマン諸語の広く見られる現象であるが、古アイスランド語から古英語に至る文学表現を集約することが期待できる。

5. 口頭試問について

三浦、高田、松下の3委員によって行われた。3委員からの全般的質問と個別の質問に対して、本論文提出者は適切かつ明快に答え、十分に対応したと判断された。

Ⅲ 学位授与要記

| | | | |
|-----------|--------------|----------|----------|
| 一、氏名・本籍 | 下宮 忠雄（日本） | | |
| 二、学位の種類 | 博士（文学） | | |
| 三、学位記番号 | 文乙第八号 | | |
| 四、学位授与の条件 | 学位規則第四条第二項該当 | | |
| 五、学位授与年月日 | 平成二十二年三月三十日 | | |
| 六、学位論文題目 | ヨーロッパ諸語の類型論 | | |
| 七、審査委員 | 主査 | 専修大学文学部 | 教授 松下 知紀 |
| | 副査 | 専修大学文学部 | 教授 三浦 弘 |
| | 副査 | 学習院大学文学部 | 教授 高田 博行 |